



大滝純司(監修)
川島篤志・菊川 誠・錦織 宏・増田浩三(編集)

『考える身体診察』

症状・主訴から組み立ててゆく身体診察のストラテジー』

沖縄県立中部病院総合内科

金城紀与史

身体診察は習得が難しく、しかも所見があるのかないのかきちんとフィードバックを受ける機会が少ないために、自分の診察技術が正しいのかもどうか不確かなまま卒業、研修修了してしまうことも多い。「白黒」ははっきりしてくれる客観的な血液や画像検査に依存しがちなサイクルに陥ってしまう。こうした批判から、OSCEをはじめとして医学部での診察技術の教育が充実してきたし、身体診察の教科書も多く出回り、有名な洋書も比較的早く日本語訳が出版されるようになった。

では本書の特色は何か。それは「考える診察」を強調している点である。心音の聞き方、神経所見の取り方など正しい診察技法を身につけても、それだけでは臨床現場では不十分である。目の前の患者の主訴、病歴から鑑別診断をあげる。鑑別診断は見逃してはいけない緊急疾患、頻度の高い疾患を軸に考える。頭の中にイメージした「診断」を身体診察によって探しに行く作業が必要なのである。問診でスクリーニングをし、身体診察で確定診断を付けるというイメージである。ところが従来の身体診察の教科書では正しい診察技法や、異常所見についての記載がされても、どういう患者でどういう所見を「見

つけ出すべきか」という記載が少ない。本書では対照的に、最初に症例呈示がある。主訴から何を考えるべきかを検討し、診断を導くための診察のポイントを示してくる。主訴は「目が赤い」、「頭痛」、「腹痛」から「血圧が高い」、「肩・膝・足の痛み」など一般外来や救急外来でよく遭遇するものになっており、限られた時間内に効率よく鑑別診断をあげて焦点を絞った診察をして診断に結びつけるポイントが記されている。

もうひとつの特色は図解が多いことである。イラストの多用で診察のポイントや診断アルゴリズムがわかりやすい。身体診察の包括的説明は本書の趣旨ではない。生きた身体診察の用い方を示す本書は医学部高学年、研修医以上向けといえる。序文にもあるが、本書は改訂を重ねて項目を増やす予定だそう。たしかに「めまい」「失神」といった主訴の項目がまだない。この本だけで外来や救急診療をこなすことはできないかもしれないが、主訴から効率よく的を絞った診察を行う流れを学習したい読者には大変参考になるだろう。

●B5判/188頁/定価5,040円(本体4,800円+税5%)

2011年/文光堂刊(販売部 Tel: 03-3813-5478)